



Number 2

December, 1998

第2回大会を迎えて

近藤 いね子

昨年11月のジョージ・エリオット協会結成大会は、協会結成準備に全く参画せずに当日伺った私にとって、まさに一大奇跡が起こったとしか言えないような、衝撃的出来事であった。それ程周到に計画、準備され、華々しく、しかも堅実に取り行われた第1回大会であった。

あれから1年、第2回大会が幕をあげようとしていて、そのプログラムにはシンポジウム『ミドルマーチ』が光っている。それは、日本ジョージ・エリオット協会のアムビシャスな活動、その質の高さを、たちどころに感得させると言えよう。

1937年秋、20代の私がケムブリッジでイギリス小説の勉強を始めた頃のこと、指導教授のD. M. ホーア博士（ニューナム・コレッジのフェローで、1938年出版の『英国現代小説研究』の著者）に向かい、自分の好きな作家のひとりとしてジョージ・エリオットをあげたことがあった。その時、先生が即座に、『『ミドルマーチ』を読みましたか』と言われたのが印象的だった。お恥ずかしいことに、その時私はこの大作を読んでいなかったばかりか、その題名すら親しみの薄いものだったのである。

それから60年、私は何度か津田塾の英文学演習でこの大作を取り上げたし、大学院の学生達とB.ハーディ編纂の研究論文集と取り組んだ。故海老池俊治氏と津田塾の講師室で話し合ったこともある。忘れられないのは、氏が初めてこの小説を読まれた時、食事をとるのも忘れて読了したと言われたことである。一家の食生活を握る主婦の私には、作品にどのように夢中になった時でも、到底考えられないことだったので、男性の読者とのちがいにひどく心打たれたことであった。それは女性に課せられた社会

的ハンディキャップに対するエリオットの女主人公達の歎きと共通するものであったと言える。

その頃海老池氏は我が国の代表的英国小説研究者で、『ジェイン・オースティン研究』を著し、自らジェイン・オースティナイトと称しておられた。私はこのページを借りて、ジョージ・エリオット協会の皆様に次のことをお願いしたい。どうぞ、近い将来、この会と同様に華々しく、堅実に、ジェイン・オースティン協会を設立して下さい。そのように申し上げることがこの『ニューズレター』からの脱線では決してないことを、G. S. ヘイトの『ジョージ・エリオット伝』（225頁）が明確に示している。「1857年2月から6月までのあいだ、エリオットとルイスは『高慢と偏見』を除く——これは単に言及されなかったに過ぎないのかもしれないが——すべてのオースティン作品を声に出して読み合った。エリオットは既に多くのジェイン・オースティンの作品を読んでいたし、ルイスはジェイン・オースティン草分けであった。』『ウェストミンスター・リヴュー』掲載のルイスの論文「女流小説家たち」は、ジェインを「既出の小説家中の最大作家」と呼び、「彼女の小説を読むことは、まさに人生を経験することである」と書いている。ルイスがシャーロット・ブロンテに熱をこめてオースティンを読むことをすすめた手紙とブロンテの返事はあまりにも有名である。

ブロンテと言えば、最近届いたGeorge Eliot Newsletterの筆頭に、Villette勉強会の知らせがある。これは我々のエリオット研究のあり方の一つを示唆するものではなからうか。このニューズレターが到着する少し前に来たGeorge Eliot Reviewの豊富な内容と質の高さ（例えば、Beer教授の記念講演）とは、まさに我々の協会の目指すいき方と共通すると言えるであろう。